You,
Unlimited

Vol.24

RYUKOKU UNIVERSITY

龍谷大学史報

Archives and History

目　次

兎にも角にも２０００年　……越前谷　宏…2

経営学部における経営情報教育の展開　……寺島　和夫…7

『学林諸記』四　天保九年（一八三八）八月～
天保十年（一八三九）三月 ……Ⅰ～Ⅵ

表紙解説・資料室だより　……18

兎にも角にも 2000 年

龍谷大学名誉教授　越前谷（えちぜんや）　宏（ひろし）

はじめに

私が龍谷大学に着任したのは 1992 年 4 月のことである。文学部の改組に伴い私の所属する日本語日本文学科が文学科国文学専攻から学科へと昇格、拡充された教員枠に紛れ込ませていただいた。

前任校は、大阪市内の短期大学だったので通勤時間も 1 時間以内に収まっていたが、堺から京都までと遠距離通勤者の仲間入りとなった。最初の教授会で遅くなった帰り、山崎のサントリーの灯りを見て遠くまで来てしまったなあ、と少ししんみりしたことを思い出す。

深草に向かうにも、当時の京阪特急は京橋から七条までノンストップであったので、七条まで行って深草へと折り返したり、素直に急行を利用したりと最短の通勤経路を模索していた。また、大宮での授業日には、週に 1 回だけ、特急「雷鳥」や急行「たかやま」を利用して京都に向かった。「鉄ちゃん」の先輩からは、ディーゼル急行の「たかやま」で通勤というだけでうらやましがられた。また、大阪から京都の大学に通う友人にも「雷鳥」利用者がいたので、二人で「雷鳥・友の会」を結成した。急行「たかやま」は 1999 年に廃止となり、「雷鳥」は 2011 年に「サンダーバード」に統一された。以下、そんな、むかしむかしのお話である。

1.　大宮学舎普請中

着任した 1992 年は、大宮本館の改修工事が始まった年でもある。4 月には本館はすでに工事用シートで覆われていた。1997 年 4 月に竣工するまでの 5 年余り、本館はほぼ工事用シートの向こう側にあり、私とともに入学した学生たちは、ついに本館を見ないまま卒業していくこととなった。

決して広くはない大宮キャンパスのど真ん中で本館の大規模改修工事が始まり、北側では北黌も改修中、南側では清和館の改築工事が最終段階を迎えていた。さらにその北黌の竣工を待つかのように、今度は学舎外塀（柵）の工事が始まる。右も左もわからぬ新任教員が疾風怒濤のごとき改築・改修工事の嵐の中に迷い込んだようなものである。

それらの改修も終わり、少し落ち着いたと思われる頃、今度は南黌の改修、さらには旧守衛所の改修が始まった。常に教室が不足する中、東黌をフル活用しながら、綱渡りのように教室を配分していく事務方も大変であったろうと、今は思う。1997 年の本館竣工まで大宮はずっと普請中であった。

それもそうだ。本館、北黌、南黌が「大教校」の講堂・生徒寮として建築されたのは 1879 年（明治 12 年）のことである。1992 年で、築 110 年を越えているのである。必要な修繕や補修はその都度なされてきたであろうが、老朽化と施設の時代遅れは否めない。

南黌では、暖を取るためのガスストーブのホースが教室の板張りの床面を這っていた（と思う）。

前の学生は暑く、後ろの学生は寒かった。雨漏りのしみも 1 か所や 2 か所ではなく、1 階にいても雨が漏る、とは〈大宮伝説〉であった。いや、改修前の北黌の 2 階の一部は抜ける危険があるので立ち入り禁止であったという。これは本当。

その普請中の大宮キャンパスで強く印象に残っているのは臨時の生協食堂である。清和館が竣工するまでの間、本館と正門の間にプレハブの 2 階建てが建てられ、臨時の食堂として使用されていたと記憶している。カンカンカンだかミシミシミシだか忘れたが、プレハブの 2 階へ上がってお昼を食べた記憶がある。工事現場と化した大宮キャンパスに、「昭和」を彷彿とさせる「飯場」のようなプレハブ食堂、なかなか見事な取り合わせであった。

京都府観光連盟公式サイトには、「重文建築群の大宮キャンパス」として「創建当初の建築物がほぼ完全な形で、しかも『群』として全体景観を形成していることは、明治建築物では珍しいといわれている」とある。この「重文建築群の大宮キャンパス」というフレーズは、1964 年の本館・正門に続いて、1998 年の「北黌・南黌」の重文指定があってはじめて成立するフレーズである。この 1997 年、1998 年あたりでひとまず大宮キャンパスも落ち着きを取り戻すことになる。1997 年には深草の 21 号館も完成し、「ほぼ三十年におよぶ深草学舎の整備はひと区切りを迎えた」(『龍谷大学三七〇年の歩み』）とされる。2000 年を前に大宮だけではなく、深草も含めた京都学舎全体がほっと一息ついたわけである。

2. 「IT 革命」

1996 年、南黌の改修によって「情報教育実習室」が誕生し、そこに 51 台のコンピュータが設置された。「龍谷」35 号には「明治の洋風建築の大宮学舎南黌に、パソコンがずらり並んだ教室誕生」との見出しがある。大宮学舎約 2000 人の学生に対してパソコン 51 台で「ずらり並んだ」といえるかどうか。同号には「関心高まるコンピュータ実用講習。今年度、受講者 1,000 人に」との記事もある。1994 年度は受講生が 60 名だったが、1996 年度には約 17 倍の 1000 名に達した、と。文・済・営・法・短（いわゆる京都学舎）の全学生のうち、受講したのは文学部の 1 学年に相当する数でしかない。でも、それが画期的だった時代があったのである。

「IT 革命」という言葉は、2000 年の流行語大賞になった。某首相が「IT 革命」を「イット革命」と言ったとか言わなかったとかが話題になり、「IT 革命」という言葉が広く認知されることとなる。そういえば、「YAHOO！」を「ヤッホー！」という先生もいた。こちらは感嘆符「！」が曲者である。「革命は一夜にしてならず」、一気に「IT 革命」がやってくるわけではなく、何事にもその「前史」ともいうべき時代がある。

3. ワープロ専用機

キーボードに触れるという意味合いではワープロ専用機の時代があった。今の学生諸君は、驚異的なスピードでスマホを操るのに、キーボードは苦手だという学生が多い。

ワープロ専用機は、1980 年代はじめには 200 万円を超え、車より高かった。ところが、1980 年代半ばから 20 万円を切るようになった。前任校の同僚の先生と「ワープロが給与ぐらいになったら買おう」と約束していた。ちょうどその時がやって来たのである。その先生と大阪の日本橋へ下調べに行った。どの店でも「きしゃのきしゃがきしゃできしゃした」と打って、「貴社の記者が汽車で帰社した」と一括変換してみせた。どうだと言わんばかりだったが、こちらは「汽車で帰社する記者」とは、都会の記者ではないなと思った。

私たち（その先生と私）は、「文豪」（NEC）や「書院」（シャープ）といった重そうな名前の機種ではなく、唯一「割注」が打てる 48 ドットの「サンワード」（サンヨー）を購入した。1 文書、原稿用紙 20 枚までしか収まらず、30 枚、40 枚で 1 論文とする我々の業界では「前半」「後半」の 2 文書に分割して編集しなければならなかった。また 2 タッチが必要なローマ字入力よりも、1 タッチですむひらがな入力の方が合理的だという当時の雑誌記事を真に受けてしまい、パソコンへ乗り換える際に大きな障害となった。

ワープロ専用機は、こちらが指示したこと以外はいっさいしない。ワードのように、おせっかい

にも先回りしてこちらを振り回すようなことはしない。素直で律儀である。ただ、ちょっと複雑な表などを印刷させると、机を離れ、コーヒーを入れ一息ついて戻ってきても、まだギギ、ガガと印刷しているようなことが度々あった。ご苦労をかけるなあと思った。

4. 携帯電話

情報通信という意味合いでは携帯電話の普及も前史にあたるだろう。携帯電話（ガラケー）の普及率が 50%を超えるのは、「IT 革命」が流行語大賞となった 2000 年のことである（PHS を含む。総務省調べ）。ガラケーを持つようになってから、電話番号を一切覚えなくなった。一番近しい家族の電話番号すら知らない。黒電話の時代は、50 件以上の電話番号を覚えていたと思う。公衆電話を掛ける人も、手帳を開けている人はあまりいなかった。みな、暗記していたのである。

1988 年から 1992 年にかけてＪＲ東海のＣＭ「クリスマス・エクスプレス」は傑作であった。15 歳の深津絵里、17 歳の牧瀬里穂がたった 30 秒のこのＣＭでブレイクする。いや、あの切ないクリスマスソング、山下達郎の「クリスマス・イブ」もこのＣＭがなければ埋もれたままかもしれなかった。それほど衝撃的なＣＭだった。遠距離恋愛のカップルたちがイブの今夜、会いたい想いと会えない不安でドキドキしているだけの話なのだが、新幹線の到着時刻に遅れそうになった牧瀬里穂が、彼の姿を改札口に発見した時のこぼれんばかりの笑顔と弾む息遣いは見るものをダメにした。しかし、このドラマも今はもう成立しない。

今の学生の待ち合わせは、「6 時ごろ、河原町で」で終わりである。そんなんで会えるのかと思ったら、6 時ぐらいに「今、どこ？」と電話である。携帯電話のない時代、待ち合わせに遅れそうになったら、あるいは、行けなくなったら、どうしたと思うかと質問してみた。「駅員に伝言を頼む」、おそらく駅員はだれが彼か彼女かわからないだろう。「駅の伝言板に書き込む」、「伝言板」を知っているだけでもほめてあげたいが、早く来て「遅れます」と書くのも変だ。ＣＭの 3 作目、高橋里奈は、自宅アパート 304 号室の扉に救急絆創膏で張られた彼からのメモに狂喜する。携帯のない時代、みんな苦労していたのだ。もちろん、携帯のかわりに絆創膏を持ち歩いていたという話ではない。

それから 8 年後、2000 年の「クリスマス・エクスプレス」CM の冒頭は、携帯電話（ガラケー）の着信音から始まる。携帯の普及率が 50 パーセントを越えた年である。ＣＭ制作側の戦略は冷徹である。

そのガラケーも 2010 年代には急速にスマホに取って代わられる。1980 年代のウォークマンが音楽を部屋から街中へと連れだしたように、スマホはあらゆる空間を書斎へ、オフィスへと変貌させた。電車で前に座っている人が 10 人いたら 8 人はスマホをいじっている。残り 2 人は沈思黙考しているのではなく、眠っている。寝ている以外は、デジタルで世界と繋がっているのだ。デジタル・デトックスが叫ばれるのも故なしとしない。

5. コンピュータ検索

コンピュータ化は研究方法にも大きな変化をもたらした。ひとつは、基本中の基本、文献検索である。大宮図書館は、1936 年竣工なので、こちらも築 70 年近くになった 2003 年から改修工事が始まる。旧図書館の通常口は南の通用門から入ったところにあった。廊下の左手には中庭が望め、その廊下に図書検索用のカードボックスが並んでいた。カード検索でお目当ての文献を探し、請求記号をメモして書庫へと向かう。問題はその書庫だった。

書庫の「庫」は「倉庫」の「庫」に近かった。もちろん空調はない。靴を脱ぎ、スリッパに履き替えて書庫に入るのだが、冬はスリッパの足先から感覚がなくなった。京都の冬は寒いのだ。夏は本を探すだけで汗だくになる。ハトが侵入するからといって、窓も開けられない。京都の夏は暑いのだ。

旧図書館は関東大震災級の地震にも耐えられる耐震性を誇っていたが、それがゆえに改修にも困難が伴うということだった。そういう建築技術上の問題もさることながら、図書館機能を停止せずに工事を遂行することの方が至難の業ではなかったか。これをあっちに動かし、あれをそっちに動

かし、常に動線を変化させつつ、図書館機能を保証していく。もう神業でしかない。

旧館から新館への建て替えで、検索方法も図書カードからパソコンへと完全に移行した。龍谷大学図書館での所蔵資料のコンピュータ入力は 1993 年に始まったらしいが、膨大な資料の入力には膨大な労力と時間を必要とする。大阪府立図書館でも同時期に入力が始まっているが、荒本へ移転する直前の 1995 年ごろ、中之島図書館で平家物語について調べたことがあった。すでにコンピュータ検索が始まっていたが、キーボード入力ではなく、50 音配列のタッチパネルであった（と思う）。「平家物語」で検索してみると 4 件しかヒットしなかった。館員に「4 件しかヒットしなかったんですが」と質問に行くと、「4 件もヒットしたじゃないですか」と言われた。こりゃだめだと思った。そんな時代だったので、カードとコンピュータを併用する以外になかった。

カード時代に比べてコンピュータ検索が圧倒的に便利なのはいうまでもない。「漱石」と入れれば、主タイトルにも副タイトルにも「漱石」を含まない本までもが大量にヒットする。ありがたいことである。

私たち日本文学の世界では、文献検索は全面的に『国文学年鑑』に依存していた。ところが 2001 年、『国文学年鑑』を作成していた国文学研究資料館が、『国文学年鑑』の利用から、「国文学論文目録データベース」の利用に切り替えて欲しい、とした（「国文学研究資料館報」57 号）。紙ベースからデータベースへの移行宣言である。日本文学の専門店ともいうべき「国文学論文目録データベース」も現在では 62.6 万件、あらゆる分野の論文を守備範囲とするメガ・デパート、国立情報学研究所の CiNii はなんと 1 億 8000 万件という途方もない件数のデータを蓄えている。しかも、簡単なキーワードを入れるだけで、どこでもだれでも参考文献目録が作れちゃうのだ。以前は、文献へのアプローチにおいて学生より優位性を保っていた教員だが、そんな優位性はとうに雲散霧消してしまった。

6. コミュニケーションツール

コンピュータは、こうしたデータベース検索とともに、コミュニケーションツールとしての役割も担っている。1995 年 1 月 17 日、阪神淡路大震災が発生。後期試験のこともあり、幸いにも京阪電車が動いていたので深草にやってくると、東門のところに「しばらくの間、休校」との張り紙がしてあった。メールやホームページもない時代、電話以外に連絡方法がなかったのだ。

2000 年前後から学内の事務連絡もメールで行われるようになったと思う。ゼミ生への連絡簿も住所、家電（いえでん）から携帯、メルアドへと変わっていった。

何よりもコミュニケーションツールとしての機能を最大限に発揮したのが、コロナ禍であった。何しろ学生も教員も大学には来るな、しかし授業はせよ、なのだ。だれも経験したことのない未曽有の事態である。ちょうどその頃（2020 年 4 月）、知人に宛てたメールがあるので引いておこう。

〇〇さま

お返事遅くなり、ご心配をおかけしました。

大学がついに入構禁止となりました。図書館も休館です。

新入生などは、入学式もガイダンスもなしで履修登録（恐ろしい！）。各教員からパソコンを通して無慈悲に出される課題に圧殺されているはずです。（図書館も開いていないのですよ。）

下宿生などは、だれが同級生かも一切わからず、おそらく飲食不況でバイトもなく、ひとりでパソコンを見つめる毎日を余儀なくされています。

学生のメンタルが心配です。

教員側も、日々のやりとりがほぼメールとなり、なにがなにやらです。

先日の教授会から、自宅からの出席が OK となりました（初のオンライン教授会）。15 時 30 分の開始直後から、画面上に書き込まれる「マイクが入ってへんのちゃうか」「学部長の声は聞こえるけど、ほかはキーンや」「だれかのささやきが聞こえる」「資料もないんか」「どこそこに格納されているはず」と、ドタバタ喜劇さながらで、思わず笑ってしまいました。

GWまでは、manabaというシステムによるオンライン授業（文字によるコミュニケーション）ですが、GW明けからは動画配信に挑戦しろ、ということになっています。Google の Hangouts Meetというシステムを使うらしいです。その説明サイトを見たら、入門編が「初日」「２日目」と１週間分ありました。門の前にたたずんで、すごすごと帰っていく自分の姿 が見えます。

授業の内容以前に、システムのハード・ソフトの対応にぶっ倒れそうです。

定年が１年遅かった。。。。

最後の一文は、断末魔の呻きに近い。オンライン会議の時など、カメラをオフにした上でレンズにシールを貼り、マイクをオフにした上で咳払いも禁止。私の部屋を覗いた娘が、カメラレンズに貼られたシールを見て、「ほんまに自信ないんやな」と、一言つぶやいてドアを閉めた。

漂流していく PC 難民に救いの手を差し伸べてくれたのは同僚の若い先生だった。手取り足取りの手厚い指導をしてくれた。小難しい PC 用語を一切使わずに教えてくれるその姿勢に、教えるとはこういうことなのかと現役最後の年に気づかされたような気がした。今でも、ご本人の前で「師匠」と呼ばせていただいているのだが、おそらく先生は「半分、いらわれている」としか思っていないのだろう。

最後の教授会が近づいてきた頃、「師匠」が「最後の挨拶とかあるんですか」と聞くので、「あるやろね」と答えると、「じゃあ、その挨拶の代わりに『さよならの向う側』を熱唱し、そっとマイクを置くというのはどうですか」と提案してきた。「そんな昔のこと、覚えているのは少数派やで」というと、「この間、NHK で特集番組を組んでいたから大丈夫です」と強く勧めてくる。自信ありげに「大丈夫」と言われてもこちらは困るので、それだけは、と丁重にお断りしておいたのだが、今にして思えば、「いらわれている」のは私の方だったのかもしれない。

経営学部における

経営情報教育の展開

龍谷大学名誉教授　寺島（てらしま）　和夫（かずお）

はじめに

1993 年に「経営情報活用論」担当の専任教員として経営学部に着任して，その後 29 年間，学部の経営情報教育の一翼を担ってきた。本稿では，経営情報関連科目担当の一教員の経験を通して学部・コースおよびその経営情報教育について振り返りたい。

1.　着任時の経営学部

まず着任時の経営学部は，1966 年の開設から 30 年近くが経とうとしていた。大学院ビジネスコースでは，社会人の受け入れが始まったこともあり志願者数は 30～40 名前後に上り，研究科を特徴づける“生産システムサロン”の開催が始まったのもこの頃である。学部においては，開設 30 周年記念出版事業に向けて総力を挙げて準備を進め，1996 年には専攻科目担当の全教員執筆による『現代日本の企業と経営』『現代日本企業の情報と会計』の 2 分冊が発刊（いずれも文眞堂）される等，活気に満ち溢れていた。

野間名誉教授による学部の時代区分（最終講義より）によれば，設立時から 1986 年度までを“草創期”としている。その間に開設時に 300 人であった入学定員は 4 回の定員増を経て，1986 年には臨時定員増も含めて 600 人に拡充されたとともに，学部教育と運営のための基本的な体制づくりが進んだ時期と言えよう。その後，設立 30 周年を迎える 1996 年度までを野間名誉教授は“展開期”としている。学部教育の充実と発展に向けた積極的な活動が展開された時期との位置づけであろう。具体的には，この間に第 1 次および第 2 次カリキュラム改革が行われ，特に第 1 次カリキュラム改革では，セメスター制の導入，学部共通コースの導入（経済・経営・法学部の枠を超えて英語，情報科学，国際関係コースを開設），科目グレイド制を導入するとともに，学部内では学問体系に基づく 5 つのコース（経営管理コース，企業・経済コース，国際経営コース，会計コース，経営情報コース）が設けられた。これらの仕組みは，先進的な教学改革の取り組みとして全国的に高く評価されるものであったと聞いている。

2.　経営情報に関する動向と「経営情報活用論」

私は 5 つのコースの中の“経営情報コース”に所属することになったわけであるが，同コースの設置に関して少し当時の状況を振り返ってみたい。その出発点となるのは，1960 年代に一大ブームを巻き起こした MIS（Management Information System：経営情報システム）に遡ることができる。これは企業経営にコンピュータを導入することで企業の経営管理に必要な情報を迅速に入手

可能にし，ひいては効果的な意思決定に役立てようとする取り組みであった。その後，代表的なものとして DSS（Decision Support System：意思決定支援システム），FA（Factory Automation：生産管理の自動化）や OA（Office Automation：事務の自動化），POS（Point of Sales：販売時点情報管理）システムなど次々と新しいキーワードが登場し，経営におけるデータや情報の利活用の場が広がりを見せていた。更に 1980 年代に入ると，経営管理面への活用だけでなく，企業戦略を担う武器として情報システムを位置づけようとする SIS（Strategic Information System：戦略的情報システム）ブームが巻き起こっていた。

このような企業経営と情報システムが一体性を強めるといった動きを反映して，1979 年に産業能率大学が経営情報学部を開設したのに続いて，多くの大学が経営情報に関する学部や学科を開設する動きが広がりつつあった。龍谷大学経営学部においても同学部や学科の開設も検討されたようであるが，実現はしなかったものの，経営情報化の流れに対して 1988 年の第 1 次カリキュラム改革において「経営情報コース」が設けられたわけである。調べてみた範囲では，その時までに全国の 4 年制大学で経営情報学部・同学科を設置しているのは 10 大学で，その後多くの大学に広がったことを考えると，比較的早期の設置であったといえよう。

それに先立ち，1984 年に紫明館にコンピュータ実習室が設置され，1988 年には同じく紫明館にコンピュータ実習室が増設され，さらに 1989 年には紫明館に教育用大型汎用電子計算機が導入されるなど，経営情報教育の推進に必要な情報システムの整備が並行して進められた（詳しくは，『龍谷大学史報』Vol.19（2018 年度）の小池名誉教授による「経営学部情報教育のスタート」を参照のこと）。

また経営情報教育を担当する教員の増員も 1989 年，1991 年と順次行われ，1993 年には筆者を加えて総員 6 名の態勢が整えられた。

当時の「経営情報コース」では，入門科目としての「経営情報処理概論」，専攻科目としての「経営情報システム論」「意思決定論」およびコンピュータの実習のための「経営情報処理実習」などの基幹科目を中心にカリキュラムが構成されていたが，それに加えて筆者が担当する「経営情報活用論」が新設されたわけである。これは前述のような経営の場における情報利活用の結びつきの強まりを踏まえるだけでなく，将来も見据えた科目設置であったと考えられ，龍谷大学経営学部の経営情報コースとしての時代認識を踏まえた独自性の高い科目であった。

3. テキストの共同開発

経営情報コースでは，必修科目やコンピュータ実習等の経営情報系科目を受け持つ教員 4 名のチームワークが密であることが、特に大きな特徴（強み）であった。以下，野間名誉教授の経営学部時代区分の“模索期”（1997～2019 年度）における経営情報コースの活動を紹介したい。テキストの共同開発から始まり，その後，初期情報教育の体制づくり，社会との接合教育の展開，そして学部教育の充実のための e ラーニングの展開へと発展していった。

まずテキストの共同開発として最初に取り組んだのが，1 年次学部必修科目「経営情報処理入門」（第 3 次カリキュラム改革で「経営と情報」「経営とコンピュータ利用」に分割）のテキストとしての『経営情報処理概論』（同文舘出版，1996 年初版）であった。経営情報系科目を担当する教員 4 人が共著者として加わった。その後長年にわたり前記学部必修科目のテキストとして採用が続いた。

続いて「経営データの分析 A」「同 B」のテキストとして『Excel による経営データの分析と活用』（同文舘出版，1999 年初版）を経営情報系科目担当教員 2 名を含む共著としてまとめた。Excel は頻繁にバージョンアップが行われてきているが，本テキストは経営学部生が身に付けるべき基本的な項目を扱っており，長年テキストとして採用した。

さらに，「プログラミングおよび実習 A（Visual Basic）」「同 B(COBOL)」のテキストとして，経営情報系科目を担当する教員 2 名を含む共著『多言語プログラミング演習』（同文舘出版，2000 年初版）を出版した。

4. 初期情報教育の展開

2000 年代に入り，経営学部では学生の主体的学びを促進するために，第 3 次（2001 年）・第 4 次（2008 年）カリキュラム改革を通して科目の 2 単位化や履修コース・モデル制の採用による履修要件の変更などが進められた。その中で経営情報コースは情報とコミュニケーション群と名称変更になり（以下“情報群”と表記），経営コースの“市場と情報を活用するモデル”との結びつきが比較的強くなるなどの変化があったが, 経営情報系科目を受け持つ教員のチームワークは一層強まっていった。

当時，学修のツールとしてコンピュータの重要性がますます高まる一方，学生間の情報リテラシーには大きな格差が存在していた。そのような中で，2003 年 4 月から高等学校で新教科「情報」が必修化され, 2006 年度入学生からは情報に関するスキルや知識の向上が期待された。そのため，情報群では 2008 年度から高校と大学の「コンピューターリテラシー」をうまく連携（初期情報教育）させることで，大学での学びをより効果的なものとするための仕組みづくりに着手した。併せて，その効果を検証するために，経営情報科目担当教員が中心となって“経営情報教育研究部会”を開催すると共に，大学教学部の“自己応募研究プロジェクト”にも取り組んだ。それらの活動成果は経営学論集への投稿, 自己応募プロジェクトでの報告, 学会発表等を通じて積極的に公表してきた。

まず，初期情報教育の充実のために最初に取り組んだのは次のような内容であった。

情報系科目担当教員が, 学部での学修や授業参加に求められる基本操作についての検討およびそれを確認するための問題の作成と採点基準を設定し，新入生全員を対象に「基礎能力判定試験」として実施することにした。

しかしながら，深草キャンパスの実習室では 500 名以上の新入生が一斉に利用するにはコンピュータの台数が足りないため, フレッシャーズキャンプの中に組み入れてその帰路に瀬田キャンパスに立ち寄り，コンピュータ室をお借りしての実施ということになった。新入生にとっては初めての大学のコンピュータ利用であると同時に，教員にとっても日ごろ使っていない教室・機器での実施ということで心配したが, 大きなトラブルなく終えた時の安堵感が懐かしい思い出として残っている。

「基礎能力判定試験」の実施と併せて,「情報リテラシー」（1 年次前期必修，1 単位）を新設し，受講後に“情報リテラシーテスト”（「基礎能力判定試験」と同水準）を実施することで，入学時のデータとの比較により教育効果の検証を可能にした。不合格者については同セメスター内に再履修可能な仕組みも設けることで，より実効性が高まるようにした。併せて，入学時に既に一定水準の情報リテラシー能力を備えている学生を「情報リテラシー」のサポーターとして選定し，授業の補助として参加してもらうことで, 能動的な学習につながるのではないかという新たな試みも始めた。

さらに中期的な視点から,「情報リテラシー」受講後，半年から 1 年経過後に再度「基礎能力判定試験」を実施することで，ボトムアップ効果の定着性を確認するようにもした。

以上のように, 入学後の早い段階での情報リテラシー能力向上と定着のための体制整備を行った。また，1 年次前期必修科目「経営と情報」の全クラス（非常勤教員担当を含む）を対象に，情報機器の利用状況・環境の把握，教科「情報」の受講状況・学習内容，パソコンでできる操作の把握などの関連データを収集する体制も整えた。

以上のような体制整備の結果，次のような成果が得られた（2008～2011 年度）。

「情報リテラシー」の最終的な合格率は, 年度により多少の変動はあるものの 94～99%に達し，情報リテラシー能力のボトムアップを図るという目的がかなりの程度達成されたといえる。サポーターについても，各年度とも得点の上昇と安定性の向上が得られ，制度の有効性を確認できた。さらに，中期的な視点から再度「基礎能力判定試験」の実施を通して，効果の定着性も確認できた。

ただし，その後の 2014 年までの分析からは，上記のような効果に加えて次の課題も浮かび上がってきた。

高校における情報教育の改善傾向があまりみられず, 入学時の情報リテラシー能力や知識のバラツキは依然として大きいこと。そのため，1 年次前期の必修科目「経営と情報」との綿密な連携・相互補完が必要であること。また，ボトムアップ効果の定着性を高めるためには，他の講義や演習

との連携が求められること。

5. 社会への効果的接合をめざして

情報群として続いて取り組んだテーマが“大学と社会との効果的接合”問題であった。

ここでは“大学生が社会人として活躍するために必要な情報活用力をいかに高めるか“の視点から，カリキュラムの再構築と教育方法の開発に取り組んだ。

まず“情報活用力とは，企業活動における問題を発見し，情報技術を結び付けて問題解決を図る能力”と定義し，そのためのプロセスを問題発見，データ収集，データ分析，結果の活用・評価の各フェーズとしてとらえ，その視点から科目を再配置した。最も基礎となるのが 1 年次の初期情報教育であることは勿論であるが，その上にデータ収集・分析スキルに係わる専門科目として「意思決定の科学」「経営データの分析 A」「同 B」,「プログラミングおよび実習Ⅰ」「同Ⅱ」を配置した。さらにそれらを経営問題の解決に結び付けられる実践的な人材育成に係わる科目として「経営情報システム論」「経営情報活用論」を位置づけた。「演習」はそれらを踏まえた総合的取り組みである。

社会との効果的な接合を意識した取り組みとしては，例えば，「経営情報システム論」では自分の言葉での記述が理解の深さの尺度になるとの考えから，復習プリントで記述式解答を重視した。「経営情報活用論」でもやはり授業内容に関連した質問への記述式解答を求めたが，そのねらいは質問に対する解答がどういう理由に基づくものなのか, 同時にその理由が解答と矛盾がないかという，論理性の向上を重視した。更に，授業を通して蓄積してきたデータを用いて，分析目的に応じたデータ分析の手法や事例紹介にも力を入れた。いずれも社会人として身に着けてほしい力である。

6. e ラーニングの実践

次のテーマとして，情報群では IT(Information Technology) や ICT(Information Communication Technology)を利用した e ラーニングにも積極的に取り組んだ。

そのきっかけとなったのが，2013 年に「経営と情報」の 1 クラスで始まった “スキャネットシート”による出席確認であった。経営情報研究部会での紹介をきっかけに他の教員にも広がり，アンケートや確認テストへも利用が拡大した。翌年には「経営と情報」の非常勤教員を含む全 5 クラスで“コンピュータ利用と学習についてのアンケート”と毎回の出欠データを一元化した。これらは, いわば教員側の初期的な e ラーニングとでもいうべき取り組みであった。

2014 年度からは「経営と情報」の一部クラスでオープンソースの LMS(Learning Management System)である Moodle の利用が始まり, 講義資料などの配布, 課題やレポートの提示と提出など, 学生も含めた e ラーニングが始まった。

さらに，2015 年からは新たな LMS として manaba course が全学に導入されたことを機に，情報群では各教員による積極的な活用が始まった。例えば，筆者担当の「経営と情報」クラスでは, manaba course を利用して授業中の出欠確認，復習小テストの実施・課題の提出を行い，学生は授業時間外で課題の解答・提出，復習小テスト・課題の採点結果を確認するという形で e ラーニングによる“非同期型分散学習”へと拡大していった。

7. パラダイム・チェンジ

以上，経営学部時代区分の“模索期”における経営情報コース（情報群）としての教育の展開について振り返ってきたが, 情報技術をめぐる変化はめまぐるしい。特に, 近年の大きな変化としては, “データサイエンス”と“生成 AI”の急速な広がりを上げることができよう。

データサイエンス化の進展に対しては，前記の『Excel による経営データの分析と活用』を発展させて，経営情報教育研究部会メンバー8 名の協力の下，経営学部生として身に付けてほしい基本的な統計やデータ分析手法，実践的なテーマについてのテキストとして『ビジネスデータの分析リテラシーと活用―Excel による初級・中級データサイエンス―』（同文舘出版，2020 年初版，2022 年改訂版）を出版した。

生成 AI に関しては,『多言語プログラミング演習』に掲載していた例題，課題についてのキーワ

ードを用いて VBA(Visual Basic for Application)プログラムの生成を試してみたところ，ほぼ正しいものが提示されてきて，感心するばかりであった。ただし，中には修正すべき点も含まれており，提示された結果を鵜呑みにはできなことも確かである。利用者には正確な知識・見識に基づいて正しい部分とそうでない部分を判断できる力が求められることになる。今後は，そういった面での対応力とその結果を積極的に活かしていく創造力が教育に求められることになろう。

2022 年度から，情報群では専任教員の世代交代が進みつつある。伝統ともいえるチームワークを活かした新たなパラダイム展開を楽しみにしている。

唯浄 石見国稲用村浄土寺住。

普天 『史報』二号頭注参照。

知事 『史報』十二号頭注参照。

冥加 『史報』十一号頭注参照。

左源太 『史報』十二号頭注参照。

左司馬 『史報』二号頭注参照。

司教 『史報』一号補注③参照。

所化橋下 『史報』十九・二十号本文解説参照。

惣会所 『史報』十二号頭注参照。

長御殿 『史報』十二号頭注参照。

八月廿日

一願書　　普天※

拙僧共知事※御役所相勤候内、所化僧衆不法之義有之、御公辺ゟ御止置ニ相成候付、御掛合之義も有之。従御本山様拙僧共三人御差止ニ相成候段、重々恐入奉畏候。然処拙子義ハ別而難渋之次第御座候ニ付、帰国之義暫時ニ而も御許容被成下度御願奉申上候。其難渋之筋と申ハ当夏五月末頃ゟ拙子自坊ニ罷在候坊守癇性底之病差起、介抱も甚六ヶ敷義ニ付、親郷預ケ置、少々宜敷方ニ向候故、自坊へ引取薬養を加へ罷在候得共、何分ニも癇性底故、又々再発仕候哉大ニ不案事、何卒罷下介抱之次第も程よく致し候様度々申来候。と此段当惑仕候。万一御用義有之候節ハ近国之義候へハ何時ニても早速上京可仕候間、暫之処帰国被仰付候ハヽ重々難有奉存候。右乍恐以書附御願申上度、如此御座候。以上。

八月　　御本山

右ハ無拠義ニ付一旦帰国御聞済、尚　御用掛り御役人中何時公儀ゟ被召候も難計候間、右之節ハ早々上京可致旨申達候様、即刻左源太※江申達ス。

八月十六日

一　　摂州源光寺　普天

司教※唯※浄往生ニ付、右代り伺之通り被仰付、以端書御用掛り左源太江申達ス。尚過日差出候封書も相渡。

八月廿四日

一金弐百疋

司教被仰付候冥加※

同百疋　　摂州新田村　源光寺　普天

輪ケサ被下候冥加

右昨日相記候通りニ候得共、百疋者輪ケサ被下候冥加ニ致献上度旨申出候間、右弐百疋者御文庫江相納、輪ケサ冥加者御納戸納りニ致し候事。※左司馬ゟ差出、右者司教之義故披露状遣之。

八月廿三日

一所化※橋下ニ而狼藉之義ニ付、知事三人共帰国差止置候処、段々裁許延引ニ、（付脱カ）帰国之義掛与力江問合之上帰国被仰付候事。

右取扱振、委曲日記八月廿三日之処ニ記有之。

同日

一金百疋　　摂州浄（源）光寺　普天

司教被仰付候ニ付、献上之旨ニ而御用掛ゟ差出候ニ付、右ハ先日※惣会所常勤より二百疋献上之旨ニ而差出候間、御用掛り江差出候様申達置候義、然処右ハ何所之間違ニ哉、御用番江差出、御用番ゟ受取、長※御殿江相納候次第、全右此度之献上ハ御用掛ゟ相尋ニ付、相納候義ニ而二重ニ相成、不案内と申ハ乍申、気之毒之義故、右百疋ハ差下ケ、尚御用番ゟ相納候金子者御用番ゟ一旦相下ケ同人江相渡、相改御用掛江為相納、今日之百疋者不及其義旨ニ而差帰候様左源太江申達ス。

僧鎧『史報』二十一号頭注参照。

勧学『史報』二号補注⑤参照。

頼母『史報』十九号頭注参照。

一学『史報』十二号頭注参照。

洪蔵『史報』十二号頭注参照。

香茸 日本特産の広葉樹林下に群生するキノコ。美味で香りもよく精進料理などに用いられる。

九月十五日

一 芸州 僧鎧※

勧学※職被仰付之。

於御対面所狭屋※頼母申達、端書相渡奉書半切着座御用懸り一学※・洪蔵※。

右勧学被仰付候ニ付、例之通り輪袈裟被下度旨御用掛りゟ申出ル。

同日

一 和州 瀧上寺 司教 黙言

自分為修学上京、今日ゟ致入寮候旨御用懸り洪蔵ゟ届出候事。

九月十六日

一 芸州 僧鎧

香茸※ 壱箱

金 壱両

右ハ勧学職、被仰付候ニ付献上之。一学ゟ差出ス。

同

一茶地金襴 芸州 僧鎧

輪袈裟

右勧学職被仰付候ニ付被下之。御用掛りへ相渡し一学ゟ同人江達ス。

九月廿一日

一金壱両 芸州 僧鎧

右勧学被仰付節上納ニ付、披露書御用掛りへ渡。

嶌田左兵衛 不詳。

圓照寺『史報』二十二号頭注参照。

西町奉行所 京都の町奉行のうち、西方の奉行所の奉行に対する称。

真野八郎兵衛 不詳。

恕龍・龍山 史報二十二号本文参照。

町代『史報』二十二号頭注参照。

伝七 不詳。

同日

一 右同人

帰国願差出ス。尤嶌※田左兵衛尉掛り故同所へ書付差出ス。仍而御聞済之旨同氏ゟ達し二相成候事。

十月五日

一口上

越中新川郡魚津浦照顕寺杳旭当夏死去有之候。然ルニ同寺義者勧学職、且先年御前講被仰付候寺ニ付、今般以思召院号御免被成下度旨、照顕寺殿始メ社中之者ゟ内願之次第申来候間、此段被聞召届候様宜敷御取計奉願候。

戌ノ九月廿九日 圓照寺※

御常勤中

十一月三日

一先達而橋下ニ而及不法候所化落着被仰渡ニ付、西※町奉行所ゟ御当方町奉行招簡ニ而罷越し候所、面会真※野八郎兵衛御達左之通り。

先達而五条橋下ニおゐて及不法候所化追々御吟味有之候処、久々揚り屋入申時被置候事故、此度之義者別段沙汰ニ不被及候間、此段御達申候。尚右之内恕※龍・龍山両人致病死候間、此義も御達申候。尚又雑物之義御書付も御差出ニ候得共、最早入用ニ無之候間、何れ成共御渡可被成候旨申達し候事。

別段町※代伝※七呼ニ参り、致病死候両人之衣丈ケ相渡し受取引取候事。

右ニ付、両人死骸取置之義ニ付、懸合之次第所化共江奉行所ニ而申渡等之次第、都而右落着之一件十一月二日已

来之日記ニ委敷留有之。

十一月十六日

一　三州長瀬村
願照寺
忍城
拙僧義

今般押込被仰付候処、病気ニ付甚難渋仕候間、何卒国元江引取養生仕候段、右之趣乍恐奉願上候。此段御聞済被成下候ハヽ難有仕合奉存候。以上。

天保九戌年
十一月十六日　御用番様

僧忍　豊後国大野郡宮尾村了園寺住。

十一月十七日

一　右同寺
忍城

国元江引取養生之義願書、御用懸り洪蔵江相渡。右者甚以不都合之義故、次第相考候様申達。亦々御用懸り洪蔵申出本人者御咎中故、御免之節叱申付、尚右願書持参之者も叱申付候間、明十八日午之刻ニ罷出候様被仰付被下度旨申出。依而其段役宅ニ而申達。

石田小右衛門

『史報』四号補注③参照。

十一月十八日

一　参州長瀬
願照寺新発意
忍城

御咎中なから帰寺願義者甚以不都合之至、元来格別之御憐愍を以旅宿ニ而押込被仰付候義、旁如何ニ付、本人者御咎御免之節不都合之段申聞、尚取次差出し候宿屋之義者町役所ゟ右願之義者御取上ニ難相成旨ニ而願書差下ケ、尚病気之趣ニ候ハヽ手寄之医師相頼候歟、亦者御殿御手医師相頼候歟、其義者定例通り可及取計様町役所小頭江御用懸ゟ申達候旨洪蔵申出。其通り取計候様申達。

同日

一橋下辺乱法之所化落着ニ付、公辺江之御挨拶被下物之義、学林ゟ御殿江入用金上納之義ニ付、御用懸りゟ伺出ル。委敷十八日日記ニ留有之。

十一月廿五日

一　豊後　僧忍※

惣会所御成之節之御直命冥加先月上納、御仰書書記ゟ取之御用懸り下役洪蔵江相渡候事。

十一月廿六日

一橋下辺不法ニ付御咎ニ相成候所化御法会ニ付、廿七日・廿八日乍御咎中拝礼之義、内々石田小右衛門※ゟ申候旨ニ而常勤ゟ申出候間、先例有之候哉御用懸左司馬江相尋候所、随分有之候由、尤本人ゟ相願次第ニ候哉如何之旨相尋候所、是者相願候訳ニ者無之旨記候ハヽ。思召ニ而廿七日・八日両日拝礼御免被仰付候旨可申達、同人江申達。

天保十己亥年

正月十九日

一左之通願書学林ゟ差出候旨ニ而御用掛り左司馬ゟ差出。

同

一願書

恵麟『史報』十二号頭注参照。
性海『史報』二十一号頭注参照。
雲岱 不詳。
月渓 江戸法照寺住。
看護『史報』二号補注⑥参照。
兼主議『史報』十号補注③参照。
参事『史報』二号補注⑦参照。

於当御坊所来亥二月上旬ゟ同下下旬迄(衍カ)御用講釈并法話相願度候間、越後国恵麟※司教御差向被成下候様、同国所化中一統奉願上候。此段御聞済被成下候ハヽ難有奉存候。宜御執成奉願上候。以上。

天保九戌年十二月　　武州江戸

性海※判
雲岱※同
月渓※同

学林
看護所

正月十八日

一当秋学林看護※并兼主議※知事義、左之通帳面ヲ以伺出、尤学林造営并当年者取締之義も有之候、可相成候ハヽ、両人之内看護福正寺廓超江被仰付度、参事※之処も来光寺寛寧江被仰付度旨、御用掛り左司馬申出。

正月

一　当秋看護

播州飾東郡谷村　福正寺　廓超
大坂藤森　超願寺　好厳

同参事

肥後山鹿新町　来光寺　寛寧

信州平出村　高山寺　貫練

右番両人之内壱人　兼主議知事

浄明寺　大愍

右奉伺。

正月十九日

一当亥秋看護　播州　廓超
同　参事　信州　貫練
同　兼主議　濃州　大愍

右之通端書を以左司馬江申達

学林買添地↓補注①

三月十五日

一※学林買添地軒役ハ同所ゟ町分差出候処、町名前名代無之而ハ不相成趣ニ付、壱人人雇有之、寄合等ニ差出候趣ニ候へ共、町役ヲ持候事も無之、右雇候ニ付而ハ雇料も入り候事故、町役所内々聞合候処、御沙汰有之候へハ町分へ申達候へハ名前人拵置候ニ不及、尤名前計も不入、町分迷惑筋も無之由、何卒町奉行へ御達被下度旨御用掛り左源太申出候事。

三月十六日

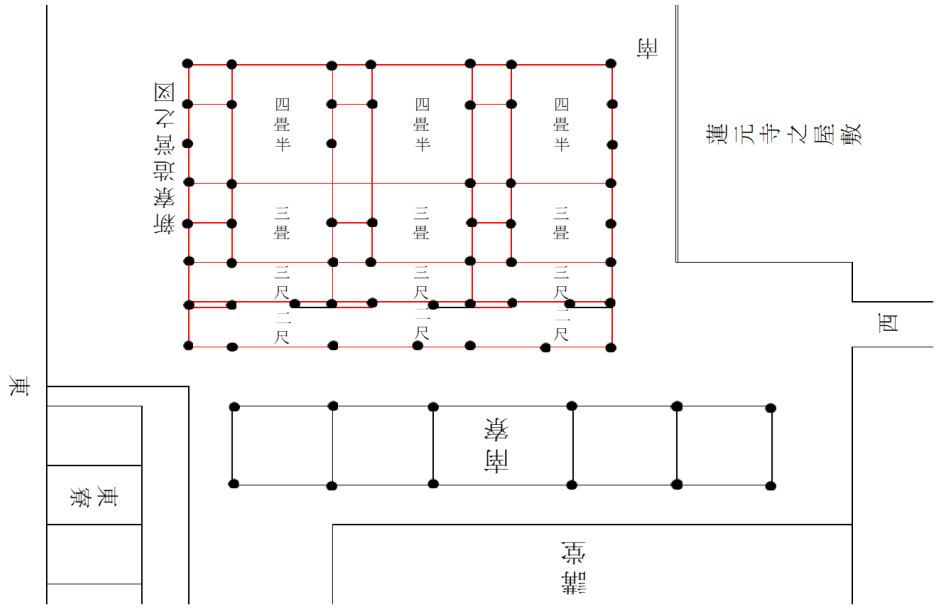
一学林買添地之義、是迄軒役入用ハ同所ゟ町分江差出候処、

町名前無之而ハ不相成候趣ニ付、壱人人雇有之、寄合等之節ハ差出候得共、町役を持候事も無之、右雇料も入甚迷惑之趣相聞候。尤町分ニおいてハ同所ゟ軒役入用も差出候事故、名前人無之而も強て迷惑之義も有之間敷哉ニ存候間、取調之上差支筋も無候ハヽ、以来ハ右町名前人相止候様、其役前ゟ町分江可被達旨、※左内江申達ス。尤内々ハ御用懸りゟ内談も有之由ニ候間、尚同所ニ而篤与可被承旨申達ス。

左内『史報』十九号頭注参照。

三月廿一日

一学林新寮此節取掛り候ニ付。相建候場所絵図差出候様、御用掛りへ達置候処、別紙之通り絵図壱枚左源太ゟ差出ス。



恵門『史報』二号頭注参照。

長左衛門『史報』十四号頭注参照。

慧門『史報』二号頭注参照。恵門。

加嶋屋覚兵衛↓補注②

三月廿二日

一歎願書

大坂浄照坊隠居仲春義、従来心得違之義有之候ニ付、於御本山御咎被仰付候処、格別以御慈悲、旧冬ゟ学林御預ニ相成、入寮被仰付、寮内ニ相慎ミ門外江出入不仕罷在候。追々先非ヲ悔ミ如実修学仕候。然ル処御真影様江参詣難相成候段、歎ヶ敷奉存候。時々願出候。何卒拙僧共両人参詣之節ニ往返共随伴仕候而両御堂之外決而他江為立寄申間敷候間、右願之通御聞済被成下候ハヽ難有仕合奉存候。以上。

天保十亥年　学林

三月　看護　※恵門判

参事　大愍判

御用掛り

御役所

御用掛り※長左衛門ゟ差出ス。

廿四日

右御免御用掛り長左衛門江申達ス。

三月廿八日

一口上書

金灯籠　壱対　看護　※慧門

右者講堂在来之金燈篭破損ニ付、今般大坂尊光寺殿門徒加※嶋屋覚兵衛致寄附候。尤寄附人并世話人・請負人等之名前灯籠台下ニ記し来申候。右之段御届奉申上候。以上。

三月廿七日　御用掛

御役所

右掛り左源太申出る。

【補注】

① 学林買添地

文政九年（一八二六）五月十九日に学寮の拡張が話題にあがったが、中々まとまらず、さらに文政十三年七月二日に大地震も起こり、うやむやになっていった。結果、天保三年（一八三二）にようやく学林の敷地拡張が実現したようであるが、この拡張は当面のものであって、根本的な解決には至らなかったようである。

結局、天保七年二月に学寮造営が本願寺から認可され、天保九年二月九日に本願寺から新寮造営の見積書が学林へ返却されることで、普請着手の許可も出た。同年三月十一日に上棟が行われたが、この新寮がいつ完成したのかは不明である。

「学林買添地」はそのような過程の中で、天保九年三月二十四日に学林で光照寺の地を買得することが計画され、七月十二日に西洞院上半町米田屋の屋敷を購入しているので、恐らくこの件に関わる土地のことを指すと考えられる。

② 加嶋屋覚兵衛

大坂の豪商。加島屋を名乗る豪商は、広岡姓と長田姓の二家があるが、『学林万検』天保十年三月二十四日条には、「大坂尊光寺門徒広岡氏別家加島屋覚兵衛」とあることから、覚兵衛は広岡姓の加島屋であることがわかる。また、同日条には「先年ゟ本家（広岡姓加島屋：引用者注）当学林大檀越也、夫ニ付主人使とし而度々学林へ右覚兵衛入来有之」とあり、覚兵衛は加島屋（広岡姓）の使いとして学林を度々訪問していたことがうかがえる。

【解説】

本号掲載の『学林諸記』は次の通りである。

天保九年八月二十日条では、知事を務める普天より、『史報』十九号掲載の所化達の一件により帰国できないでいたところ、坊守が病気となったため、帰国が願い出され、許可がされるが、所化等の問題により奉行所からの呼び出しが有った場合にはすぐに上洛するようにという条件が出されている。

八月十六日・二十四日条では、唯浄死去により、普天に司教が仰付られ、その冥加と輪袈裟の冥加として二百疋を上納し、司教の披露状が下されている。

八月二十三日条では、知事三人に帰国許可が出され、また普天が御用掛への二百疋の上納冥加を誤って御用番に納めてしまい、重複した分を返金されている。

九月十五日条では、僧鎧に勧学に任命され、司教懸了の入寮が報告されている。

九月十六日条は、僧鎧の勧学任命の御礼上納と輪袈裟授与、帰国許可に関する記事である。

十月五日条は、死去した杳旭への院号に関する記事である。

十一月三日条は、先記の所化のうち牢中で死去した恕龍・龍山の引き取りに関する記事である。

十一月十六・十七・十八日条では、押込になっていた忍城が帰国を願い出たが、許可されなかった。また、十八日には、先記の所化に関する件が決着したため、奉行所への贈物のため、学林より納金がなされている。

十一月二十五日条は、僧忍の冥加に関する記事である。

十一月二十六日条には、先記の所化から二十七・二十八日の報恩講の拝礼の願い出があり、先例があるということで許可されている。

次からは、天保十年の記事になる。

一月十九日条には、築地御坊での二月の御用講のため恵麟の下向依頼がなされている。

一月十八・十九日条は、看護・参事・知事兼主議任命に関する記事である。

三月十五・十六日条には、学林買添地に関する軒役についての寺内町方に関する記事である。

三月二十一日条には、学林新寮の指図が提出されており、写しが載せられている。

三月二十二日、二月四日条は、謹慎している仲春の両御堂参詣に関する記事である。

三月二十八日条では、学林講堂の金灯籠奉納に関する記事である。

以上のように、本号掲載分では、所化問題への対応とともに、学寮増築を進める学林の動きが看取できる。

※本文の翻刻・解説は小松正弥（本学大学院博士後期課程）、頭注・補注については荒木洋太朗・北村太智（本学大学院博士後期課程）が担当した。

表紙解説

今年 2024 年は、深草キャンパスの顕真館が落成してから 40 年目の年にあたる。

顕真館は、当時の千葉乗隆学長の言を引くと、「本学の建学精神を具現する教育施設の原点としての性格を持つ建物として、その建設を発起」したとしている（『龍谷』第 12 号、1984 年）。

また、顕真館で一際目を引くのが、正面に掲げられた平山郁夫氏が制作した釈迦説法の図「祇園精舎」であろう。当時の山崎慶輝宗教部長によれば、平山氏や所蔵者の柊美術店に「祇園精舎」を顕真館の正面に掲げたい旨を直談判した結果、両者ともに快諾してくれたといい、「いま現代に再び祇園精舎が出現する期待でいっぱいである」と、完成を待ちわびている様子が伝わってくる（『龍谷』第 11 号、1983 年）。

顕真館は日々の祈りの空間としてのみならず、1984 年 3 月の完成直後から、卒業式・入学式など大学のセレモニーの場としても利用されてきた。現在は学生数の増加により、学部の入学式や卒業式は体育館で行われているが、大学院の学位授与式は今も顕真館で執り行われている。

前置きが長くなったが、本号表紙の写真は、顕真館を背景に撮影された結婚式の記念写真である。『龍谷大学校友会報』第 14 号（1984 年）によると、本学の卒業生であった新郎が、顕真館建設の話を聞き、本学へ申し入れをしたところ、許可が下り、顕真館での挙式に至ったという。顕真館は在学生のみならず、卒業生にも開かれた礼拝堂であることがうかがえよう。

また、本学は現在、創立 400 周年を迎える 2039 年度末までの長期計画「龍谷大学基本構想 400」の一環として、「深草を森にする」をコンセプトに「龍谷大学キャンパスブランド構想」を推進している。施設整備イメージ図を見ると深草キャンパスはガラリと姿を変えそうであるが、本学の建学の精神を体現した顕真館は、深草キャンパスがどれほど様変わりしても、きっと大切に残され、次代へと継承されていくに違いない。

（北村太智）

資料室だより

資料保存作業として、以下の作業を継続しておこなっています。

・事務文書綴の修復、所蔵資料の調査・目録化、『立案裁決綴』の画像データ化、資料製本。

2023 年度刊行号（24 号）特記事項は以下のとおりです。

・表紙掲載写真について、肖像権を考慮し、一定の画像処理をしている箇所があります。

大学史資料室 URL は、以下のとおりです。QR コードも公開します。

https://library.ryukoku.ac.jp/Guide/page_id26

※15 号より、『龍谷大学史報』は Web 版での発行となっています。

販売情報

『龍谷大学三百五十年史
通史編(上巻・下巻)／史料編(第一巻～第五巻)

■体裁:A5 判／布クロス上製本／箱入
■定価:各 1 冊 5,000 円（消費税別）
●ご注文は大学史資料室まで、
　FAX または書面にてお願いいたします。
●送料:有料（送料の実費をご負担いただきます）

編集・発行　　2024 年 3 月 19 日発行

龍谷大学大宮図書館
（大学史資料室）
URL
https://library.ryukoku.ac.jp/Guide/page_id26

〒600-8268
京都市下京区七条通大宮東入大工町 125-1
TEL：075-343-3311（内線 5114）
FAX：075-343-3362